

8月16日のレッスン

パウロが民に語る

主要聖句：「そして彼は言った、『私たちの先祖の神は、あなたがたを選び、神の御心を知り、その義なる方を見、その口から出る声を聞くようにされたのです。あなたがたは、自分が見聞きしたことを、すべての人々の前で、神の証人となるのです。』」

使徒言行録 22:14,15

選読箇所：

使徒言行録 22:1-21

今日の学びでは、使徒パウロがエルサレムのユダヤ人同胞たちの前で、ダマスコへの道でキリストに回心した体験を語る様子を聞きます。タルソのサウロ（後にパウロと改名）を神が選ばれたことは、当時、主の弟子たちを困惑させました。初期教会の指導者たちとサウロの間には、公然とした敵意がありました。彼らはサウロを、キリスト教徒を迫害する者としてしか知らなかったからです。彼らは、サウロの出生地、教育、そして生い立ちが、異邦人への特別な使命を果たすための準備となっていたことを理解していませんでした。彼はローマ市民であり、教養があり、深く敬虔で、パリサイ人の家系に生まれました。彼は律法と、イスラエルに対する神の約束に対して熱心でした。（使徒言行録 26:2-5；フィリピの信徒への手紙

3:4-6) 初期の教会が当然のことながら彼を悪人と見なしていたのとは異なり、彼は悪人ではなく、その行動においては誠実で敬虔な人物であった。キリスト教徒がモーセの律法に反対していると信じていたサウロは、良心に従って彼らを迫害していたのである。

パウロは誠実ではあったが靈的に盲目であったため、主は彼が進路を変えることができるよう、彼を立ち止まらせた。彼の熱意は、教会を迫害することから、キリストとその信徒たちに仕えることへと向け直された。これは墮落した人間の転向ではなく、誠実な人物への導きであった。神は今や、彼をユダヤ人と異邦人の双方に福音のメッセージを宣べ伝えるのに理想的な人物として任命しようとしていた。

神は誰にも信仰を強要されることはなく、誠実な心にのみ御自身の真理を開かれます。サウロの判断は誤っていましたが、その意図は正しかったため、主は彼の目を開かれました。パウロが語ったところによると、ダマスコへの道中で、天からのまばゆい光が彼を包み込み、彼は目を失って倒れました。すると、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声が聞こえました。誰が話しているのかと尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである」という答えが返ってきました（使徒言行録 22:6-8）。これは、キリストがご自分の民とどれほど密接に一体となっているかを示しています。彼らを迫害することは、キリストご自身を迫害することなのです。その真理こそが、キリストの体であるすべての

兄弟姉妹に対する私たちの振る舞いを導くべきものです。

サウロはすぐに、「主よ、私はどうすればよいのですか」と尋ねました。（使徒言行録 22:10）これは、彼の意志を完全に委ねたことでした。キリストに関する真理を理解した瞬間、彼はキリストに自分の命を捧げる覚悟ができたのです。今日の信者たちも、同じ反応を示すべきです。かつては誤りに目がくらんでいたが、それでも誠実な人々は、感謝と熱意、そして奉仕の生活をもって真理に応えるべきです。

主はサウロをダマスカスへ遣わされました。そこで、尊敬され、敬虔な弟子であるアナニアは、この新しく改宗した者が、異邦人や王たち、そしてイスラエルの民の前にキリストの御名を宣べ伝えるために、またその召しのために苦難を受けるために特別に選ばれたことを知りました。サウロはキリストの完全な神の栄光を目撃したわけではありませんでしたが、イエスが復活し、栄光に包まれたことを 確信をもって知るには十分なものを目撃したのです。（使徒言行録 22:11-13）アナニアは、今日の「鍵となる聖句」の言葉をサウロに語りかけ、彼を「すべての人への証人」として福音のメッセージを宣べ伝える使命へと導いた人物でした。

パウロは、自分が見聞きしたことに忠実な証人でした。私たちも同様であるべきです。他者に忠実に真理を分かち合うためには、まず自分自身がその真理を理解しなければなりません。パウロのよ

うに、福音のメッセージを証しするにあたり、神の御心を信頼しましょう。